
Call of Duty Modern Warfare2,5 「Japan」

KAME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Call of Duty Modern Warfare 2, 5 「Japan」

【ZIPコード】

NO8004

【作者名】

KAME

【あらすじ】

ゲーム「Call of Duty Modern Warfare 2」での、日本側の物語です。アメリカに続き、突如侵略された日本。人々の戦いを描いていきます。

処女作ですのでいろいろと未熟な部分がありますが、その点をふまえて読んでください。

プロローグ

0日目

・変わらぬ日常

朝起きて、母さんの作ってくれた朝ご飯を食べながらテレビを見る。ただ、その日違つたのは

『米、武装組織による攻撃を受ける！－空港テロへの報復か！？』

という、地球の裏側についての特集が放送されていたくらいだつた。

「大丈夫かしらね」

「大丈夫だろ、あの国は強いんだから」

「やっぱり沖縄からも撤退するのかしら」

などと、両親が少し不安なことを口にしているのを後にし、自分はいつものように学校へと向かうのであつた。

・「米、武装組織による攻撃を受ける！－空港テロへの報復か！？」

このニュースは同僚達の話題の的であつた。

当然である、自分達のいる国がいるのもアメリカ、彼らの軍事力のおかげでもあるからである。

自分たち自衛隊の装備は確かに敵と戦うには十分である、しかし、

「守る」となると米軍による後ろ盾が必要だ。

しかし、今そのアメリカが攻撃を受けている、後ろ盾がない今の日本はまさに格好の的である。

「日本はさすがに攻められないだろ」

誰もがそう信じたいと思っていた。

1回目（複数形）

やつぱり自分には語彙力がないと痛感します（涙）

海上保安第11管区
巡視船『りゅうきゅう』搭乗員 「松崎圭介」
日本 沖縄諸島周辺

23・14

警報が鳴る、レーダーに不審船を捕捉したとの情報である。

アメリカが攻撃を受けてからといつもの、不審船の出没する頻度
がかなり増えた。

空も同じく、北からのロシア機は少しは減ったものの、代わりに
西からの中国機はその分やつてくる。

それも以前よりも接近してくるのである。

自分は、海の担当だからよくわからぬが今やるべきことは、不審
船を「拿捕」し「法に則つて裁く」ことだ。

「ひむらは海上保安巡視船『りゅうきゅう』直ちに活動を停止し、
本船の指示に従うべし」
現場に到着し不審船を拿捕するべく、まずは停止指示をしてみたの
だが一向に活動を止める気配はなくかれこれ5分が過ぎようとして
いる。

どうやら不審船は漁をしているらしかった、当然無許可で。
アナウンスの意味がないと分かった艦長は、機関砲を不審船へ向け
る許可を出す。

しかし、問題はここからであつた、

指示通りに射手は機関砲を不審船に向ける、当然撃つことは許されない。

しかし、不審船はいつこつに密漁を止めようとはしない、それどころか何度も体当たりをするような素振りまで見せてくるではないか。

威嚇射撃の指示が出る。

射手は不審船にあたらないよつに威嚇を開始する。

すると、不審船は速度を下げ始めたではないか。

スクープを撮れるではないかと期待して、ビデオカメラを構えていたもののどうやら「平和的に」終わるかと思われた
そのとき

「不審船甲板上に動きあり・・・あいつら武器を持っているぞ！自動小銃にそれから・・・対戦車ミサイルだ！..」

アナウンスが悲鳴に近い声を上げる、と同時に不審船の甲板がちがちか光り始めた。

巡視船には小さな穴が次々と開いてゆく

艦長からの発砲許可が下り、射手が引き金を引く。

サーマルビジョンを使つてゐるため、熱源反応である相手の乗組員は丸見えだ。

機関砲から発射された大口径の弾丸は相手の船に着弾、つぎつぎと風穴を開通していく。

すると、不審船の甲板から対戦車ミサイルが発射される。発射されたミサイルは吸い込まれるかのように機関砲へ飛んでゆき、そして爆音が響いた。

「機関砲被弾！繰り返す、機関砲に被弾！！発砲不可！」

その瞬間に、こちらの武器が失われたが相手は一向に撃つのを止めない

こちらはほぼ丸腰に近い状態になってしまい、抵抗できないまま撃たれている状態だ。

不審船は突如スピードを出し始めて海の彼方へと去っていく。

そう、西の方角へ。

ぼろぼろになつた『りゅうきゅう』は、東の方角へと進んでゆく。幸いなことに、けが人はいなかつた。

不審船と遭遇し、たつた17分の出来事だった。

・・・9時間後

公立高校2年生 「津田 吉弘」

日本 埼玉県

8・35

今日は待ちに待つた日曜日！

普段から寝不足である自分にとっては貴重な休養日である。

明日は修学旅行があるが、もう既に準備は整えている！

さあー今田はどうふり寝るぞー！ー

と言いたいところだが、案の定親が叩き起こしに来る。

勘弁してくれ

結局、頭が働かない状態で朝食を食べている。

テレビからは相変わらず耳障りなCMが流れている
どうしてこんなにやかましい子どもがテレビに出演しているのかと、
疑問に思つてゐると何かの特集番組が始まった。

『尖閣諸島沖で海上保安が不審船により攻撃を受けるー。』

とこつ題名でなぜか自然とため息が出る。

「まだどうせ中国なんぢやないのか」

「なんだか物騒な世の中ね」

「ほり見ろ見ろー・酷いやうれ様だぞ」

などと、両親の会話を聞きながらも再度テレビ画面を見ると、攻撃
を受けたらしい大きな船が映つていた。

・・・まさに、蜂の巣であった、船には一面銃弾の跡が残つており、機関砲は原型を留めてはいなかつた。

「ひょっとしたら、戦争が起きたりしてね」

「バカ言え、仮に起きても小競り合い程度だ。第一、今戦争が起きても誰も得しないに決まつてゐるだろ」と、父に軽くあしらわれムツとする。

そのときは「冗談で言つたつもりだつた。

部活もないのとその日は友人と遊び、バカをやつて平和に過ごしたのであつた。

そう、いつもと変わらぬ「単純で平和」な1日であつた。

ああ、彼女が欲しい！

一回目（後書き）

感想お待ちしております。
誤字脱字、おかしな部分があれば、指摘お願いします。

2日目 民間人視点

「こちらセキュリティー、そちらのネットワークにウイルスを検出した。なにか異常はありませんか。どうぞ」

「いやあ、本部。現在スキーイングを実施中、少し待ってくれ……」

「そんなはずはない。他の部署にも確認をしてもらひ、結果が出た、何も異常はない。なにかの誤作動では？」

『おい、松浦、そつちばどうだ?』『いっちも反応が出てこないだ』

『わかつた、大宮は？』『ばつちり反応してる！』——本部、こ

「さりせキヨリティー、再度スキャンをして」と

!? 何だこれは！誰か来てくれ！！ネットワークがダウンした！！」「

2

公立高校学生 一溝田 吉弘

日本
京都行き新幹線
京都までは残り34km

11:25

「いえーい！引つかかつたーーー！」

「だからババ抜きは嫌いなんだよ」

「それにしてもタツチ弱いな」

状況を説明しよう。

自分はいまクラスメイトと共に新幹線の中でトランプをして修学旅

行を満喫しているところであり、ババ抜きが異常なほど弱いタッチこと龍也が悲鳴を上げているところだ。

「ああああ、泣いている暇はありませんよ！第一ラウンドをひとつ…？」

突然列車が止まった。

それにつられてみんなも倒れそうになる、が自分はなんとか耐えた、なんてスタイルッシュでしょうか！しかし、当然誰も自分なんかには気にもしない、軽いパニック状態だ。

先生は誰も怪我をしていないかを確認している。

少しすると、アナウンスが鳴り

「お客様には大変ご迷惑をおかけしております、ご都合により本車両はここで待機をしております。繰り返し申し上げます、本車両は」

残念がる声が一斉にあがる。

それも当然だ、残り十数分もしないうちに待ちに待った京都に着くというのに、まさかの待機なのだ。

だが、トランプをしている自分たちに関係なく。

「じゃあ、続きを」

「おー！見ろよ！F-15飛んでいるぜーーー！」

窓から空を見上げてみると、確かに戦闘機が数機飛んでゆくではないか、それも京都の方へ。

「お前興奮し過ぎだろ！-とりあえず気を取り直して大富豪を

「おい・・・空戦していないか、今」

話を中断されて落ち込みながらも、空の方角をじっと見ていると京都の方から今度は別の戦闘機が数機やって来た、と思つと突然向きを変えてミサイルを撃つてているではないか。

ミサイルは京都の方へと向かっている戦闘機の一機に当たった・・・
誰もが取り付かれたかのように見ていると、撃ち落とされた戦闘機
の破片がこっちへ落ちてきてすぐ目の前の線路へと轟音を立てながら
降り注いだ。

そして、もうどっちだか分からぬ戦闘機がまた一機撃ち落とさ
れて、再び破片がこちらへと向かっているではないか！

本能は「逃げる！」とせかしてくる、しかし体はまるで棒にでも
なったかのように全く動かない。

そういうしていふうちに破片は隣の車両へと降り注いでいく。

悲鳴と轟音が聞こえてくる。

そして、その隣の車両から人が逃げ込んでくる。

何人かは血を流していた。

悲鳴が聞こえる、クラスの声もあれば逃げてくる乗客の声もある。

再びアナウンスが鳴り

「乗客の皆様にお知らせします！車掌および運転手との話し合いの
結果、皆様を避難させることにいたしました。皆様は速やかに本車
両から」

言われなくとも分かっていた。

外に出るのは危険だが、こうしていてもしょうがない。
みんな車両から降りていぐ、というより逃げていく

「なあ、コッキー、これ夢じゃないよな

タツチが震える声で聞いてくる

「当たり前だろ・・・これが夢ならお前がババで負けているのがおかしいだろ」

「そうだよな・・・」

体からアドレナリンが分泌され、妙な感じがした。

夢であつて欲しい。

列車から降りながらそう思い続けた。

2日目 民間人視点（後書き）

感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしな部分があれば、指摘お願いします。

2日目

陸上自衛隊 第一普通科連隊 一等陸士

「佐藤 智久」

日本 金沢市まで1キロ弱

12:35

「こじら第七地区、誰かアルファ4へ増援を」

「第3地区に敵の落下傘部隊が押し寄せている。」

「敵の装甲車と遭遇、至急航空支援を」

無線からは「これから自分たちが到着する予定である現場の状況が聞こえてくる。車内にいる仲間達も顔が強ばっている。

自分達、第一普通科連隊は突如現れた敵の排除のために金沢市へと急行している。

敵は大規模な部隊であり、装甲車から攻撃へり、さらには戦闘機と輸送機からの落下傘部隊までもが攻撃を開始しているというのだ。

「弾薬装填！」

分隊長「宍戸 森弥」が弾薬装填の指示を出し、全員がライフルのボルトを引いて弾薬を装填する。

本当に実戦が始まるのだ。

そう、だれもが緊張して思っている。

自分もまさか急に実戦を経験するとは思いもしなかった。

あまりに急すぎるため家族への電話はもちろん、遺書を書く暇さえもなかつた。

それは自分だけではなく他の隊員も同じことだが、それでもせめて両親への電話だけが心残りだ。

銃声が聞こえ始め、緊張感がさらに高まつていく。

すると急に視界が明るくなつたかと思うと、一瞬気を失つてしまつた。

気が付くと味方の隊員が安全な場所まで自分を担いでくれていた。

「佐藤、どこか怪我はしていいないか」

「大丈夫だ、それよりも何が？」
かされる声でなんとか答える。

「敵の戦闘機だ、まあ、見ての通り俺たちはまだ生きている。トラックはお陀仏だけどな。」

味方の指差す方向の遠くにはさつきまで自分たちの乗っていたトラックが横転し、煙を吐いている。
そしてそのトラックの近くには大きな穴、否小さなクレーターができていく。

「こちら一キータ、敵の戦闘機による空爆を受け移動手段を失つた。
これより徒步で移動するため予定時間よりも遅れる。オーバー」

「こちらラボーラー解、できるだけ早く来てくれ！」

「了解、辛抱してくれ。アウト」

無線を使用していた隊長が、こちらに振り返り、状況を説明する。

「自分たちはいま見ての通り移動手段を失った。増援を必要としている市内の部隊と合流する必要がある、わかつてていると思うが歩いていくしかない。各自警戒して移動するように。いいな」

と、言い終わるや否や、近くの木に何かが当たる音がした。当たったのはそう、銃弾だ。

銃弾の飛んできた方向を見ると、自動小銃を手にし自衛隊とは違つ迷彩服を身にまとつた6、7人の集団が見えた。

「隠れろ！姿勢を低く！！」

隊長が大声を出し、応戦する。

それに続くかのように他の隊員達も敵に狙いをつけ、89式小銃を撃つている。

「町への道は酷く険しくなる。」

そう、本能が告げていた。

2回目 自衛隊視点 1 (後書き)

感想お待ちしております
誤字脱字、おかしな部分などがあれば、指摘お願いします。

「再装填、援護を！」

「了解」

撃つても撃つても当たらない。

当然と言えば当然なのだが、敵は弾には当たってくれない。戦場で映画に出てくる敵のように体を曝け出すのはまさに自殺行為に等しいからだ。

「敵はＬＭＧを持っています！」

「Ｊのままじや日が暮れるぞ」

「佐藤、杉永、山田。回り込んであのＬＭＧをだまらせろー・今から援護するから全力で走れ！いいな」

隊長の突然的な秒読みが終わると共に味方達は一斉に攻撃を始める、それに合わせて指名された自分達は反射的に全力で走った。

敵からの攻撃の手は弱まつたが、それでも走っている自分たちを狙つているらしく、すぐ隣の木や足下が弾けていく。

体内からアドレナリンが分泌される。

何も考えずにとにかくできるだけ速く走った、安全な場所に着くまでかなり長く感じた。

安全であるう場所で息を切らせていると、他の一人も追いついてくる。

「撃たれたか」

「いや、山田お前は」

「大丈夫だ、まったく生きた心地がしないぞ・・・と、互いに無事なことを確認していると」

「何をもたもたしているー?早くやつを黙らせるー」と無線から隊長の怒鳴り声が聞こえてくる。かなりの銃弾が飛んできているらしく、弾の風を切る音が無線からも聞こえてくる。

「了解、これより敵の制圧に掛かる、移動している間は敵の注意を引きつけておいてください、オーバー」

「もう十分すぎるほど注田をねじこむーーー」

「よし、急げ」

敵のLMGへの距離は音からすると大体50メートルほどらしい、常に激しい銃声が聞こえてくる。

素早く、そして慎重に行動が必要とされている中で先頭の山田一等陸士が「止まれ」と合図をする。

何かを見つけたらしく指差す方向を見ると、いた。

敵だ

どうやらここはまだ気がついていないらしく、警戒しながらこちらに近づいてくる。

敵も自分たちと同じ側面からの攻撃をしようとしない、しかし運が悪かった。

「同時に撃つぞ、いいな。俺は右のやつを、佐藤は真ん中のやつをやつてくれ」

「おれは左でいいんだな」

「そうだ」

3、2、1・・・撃て！

狙いを定め、引き金を引く。

すると敵は崩れるように倒れる。

「・・・行くぞ」

死体のそばを通り過ぎたとき、つい死体を見てしまった。

重装備でSF映画に出てくるロボットのような外見をしている、だが顔を見ると人種は違えども自分と同じ人間だ。

目は見開かれており、弾が当たった頭からは淡々と血が流れていた。

殺したんだ

初めて人を殺したんだ

彼には家族がいたかもしれない、子供もいたかもしれない。

自分はたった今、自分と同じ人間の人生を終わらせて

「おい、佐藤。いちいち撃つた敵のことは気にするな。この先何十人も殺していくかもしない、こいつらだつてあのまま見つけていたら俺たちを殺す氣だつたんだ。考えるのは隊長達を助けてからにしろ。いいな」

「——わかった

とにかく、考えるのはやめることにしてやつ。

歩いていると、「MGを撃つている敵が見える位置に到着した。わざと回り、敵を排除。

「隊長、やりました。クリアです。」

「いいぞ、よくやつた。こっちで合流だ。」

数分ですくなくとも5人の人生が終わってしまった。自分の手によつて。

「目的地まであと少しだ。行くぞ」

隊長の後に付いていき、市内へと入る。激しい銃声のする方向へと向かう途中、全員が神経を張り巡らせていた。

建物の窓、屋上、路上、すべて。

空を見上げると数えきれないほどのパラッシュショートが町に降り注いでおり、中には空挺戦車まで見えた。

到着したのは国道で、そこには味方がおり、既に銃撃戦を始めていた。

「「ひらりーキー タ部隊です！状況は」

「今、市民の避難が完了するまでの間ここで敵を食い止めているところだ、敵の空挺部隊が町中に降り注いでいて、対処しきれていな。貴様の部隊は左翼の防衛に当たつてくれ。」

「了解です、聞いたな。行くぞ！」

移動している間は姿勢を低くしていた、下手に頭を上げると流れ弾に当たりかねない。

左翼の建物は悲惨であった。

建物にはいくつもの大穴ができており、その穴から味方が敵の侵入を食い止めるべく制圧射撃をしているのが見えた。

中に入るとそこら中に血の後があり、赤くなつたガーゼが転がつていた。

「増援だ、今の状況は」

「今はなんとか食い止めているが敵の攻撃が激しい、負傷者も多数出ていてる。あそここのネットカフェを拠点にして敵を食い止めてくれ。あそこからなら見晴らしがいいから、敵を食い止められるはずだ！」ネットカフェというのは今いる建物の向かい側の建物である、確かにあそことの2階なら道路が見晴らせそうだ。

「了解、あそこまで走るぞ！」

休む間もなく建物の裏口から出て、比較的安全な方の道路を全力で

8人

(「のうち3人はさつきまでいた建物から付いて来たやつらだ）
が「ネットカフェ」へと走る。

周りは静かだ。

ネットカフュへと到着し、いざ入る!すると隊長は自分たちを止まらせる。

店内へと意識を集中すると人の気配がする。

「ハハハハハキータ、チャーリーハウス」

「ハハハチャーリー」

「ネットカフュに誰か派遣しているのか」

「いや、あそこには誰もいないはずだ」

「了解、敵と思われる集団を発見した。これより確認する。佐藤、先頭を頼む」

「・・・了解」

慎重にドアを開ける。

隙間から見る限り誰もいないらしい。

そう思いドアを開けると目の前にナイフが見えた。

反射的に身を屈めて避け、ナイフを持っている腕と手を掴みそのまま壁に叩き付ける。

ナイフを持つ手を壁に打ち付けて、落とし、そのまま相手を床に倒し即座にピストルを抜き相手に銃口を向ける。

引き金に指をかけた瞬間、目に映つたのは「一般人」であった。

「撃たないで!!!頼む!」

「こなんところで何をしているんですか！」

「友達とここにいたらいきなり爆発が起きて、それで・・・」

「ここに残つた」

持つていたのはナイフではなく包丁だった、民間人だと気づくのが遅れたら・・・

「怪我はないか佐藤」

「大丈夫です、それよりも民間人を・・・「他に誰かいますか？」」

「店員と何人かの客は逃げていったけれども、4人います」

「分かりました。」

「山田と杉永は民間人の保護を、残りは敵の迎撃。いくぞ」パソコンが大量に並んでいる1階を後にして、一階へと上がる。

窓から道路を見てみると

敵がいた

それもすぐ下に。

「敵発見！すぐ下です！！」

「撃て！撃て！中に入れるな！！」

瞬く間に耳をつんざくほど銃撃戦が始まつた。

2回目 自衛隊視点 2（後書き）

「ご感想お待ちしております。
誤字脱字、おかしな部分などがあればご指摘お願いします。

2日目 自衛隊視点 3（前書き）

少し、書き方を変えようかと思います。
これで読みやすくなればいいのですが（汗）

今度ばかりは慎重に狙つてはいられなかつた。

こちらに気づいた敵は遮蔽物へと走る者と建物に突入しようとする者に分かれ、遮蔽物に隠れている敵からの制圧射撃を気にしながらも室内に突入して来ようとする敵を食い止める必要があつた。

敵が気づくと同時に窓のすぐ下にいる敵に弾を3発浴びせ、遮蔽物へと駆け行く敵にも続けて2発浴びせる。

撃つた相手が死んだかどうかは確認せず（正確にはそんな暇がなかつた）弾を撃ち続ける。

弾倉の中身がなくなると素早く「ハチキュー」と「89式5.56mm小銃」の弾倉を本体から落とし、自由な手で「9mm拳銃」を引き抜き建物に走つてくる敵を撃つ。

拳銃の弾倉が空になると同時に小銃の弾倉を差し込み、弾を装填する。

「竹中は！」で「一二三」で機銃掃射、山田と佐々木は竹中の支援のためにここに残れ。伊藤は会談の見張りを、残りは1階で敵の排除。いいな！」

隊長の指示で始めて気づいたが、どうやら気づかない間に敵が何人か侵入してしまつたらしい。

「静かに動く事」という指示のもとで静かに階段を降りていく、一階で動き回る「人」の気配がはつきりと感じられる。

作戦では誰も乗つていらない空のエレベーターを降ろし、敵がそのエレベーターに気を取られた隙をついて突入するという寸法だ。

「チーン」

ドアの向こうからエレベーターが到着した音が聞こえる、敵の話し声が止まる。

「よし、行くぞ！」

先頭の田中がドアを開ける瞬間に緊張が最高潮に高まる、死ぬかもしないという恐怖も感じるがアドレナリンによる作用で興奮もしている。何とも言えない気持ちだ。

開けられたドアから連なるように味方と室内へ突入する、部屋には当たり前と言えば当たり前だが銃を持った5人ほどの「敵」がいた。

反射的に銃の狙いをつけて、撃つ。敵が倒れる。

味方もそれぞれ狙いをつけ引き金を引く。

気が付くと「敵」は全員倒れており、カーペットに赤い染みが広がっている。

「早く防御陣形を築け！ まだまだくるぞ！」

急いで敵が来る方向の道路が見渡せる場所にそれぞれが着く。

道路を見るところちらに走つてくる敵がいた、反射的に引き金を引く。撃たれた敵は走っている勢いをなくせずにそのまま慣性の力に従つてすぐ近くに転がってきた。

体は動かないが、目はこっちを見ている。怯えている田だ。

そんな事を気にせずに、淡々と狙いをつけて銃を撃つ。

どうやらもう突撃をしようとする敵はいないらしく、遮蔽物から撃つてきていたやつらも5分ほど粘り、そして退却していった。

「みんな大丈夫か！」

「大丈夫です、隊長はどうですか？」

「大丈夫だ、「山田、そっちに異常は」」

隊長が無線で聞くと、帰ってきたのは。

「竹中がやられました・・・」

「ちくしょうが！！佐藤、見てこい！！！」「伊藤、そつちに佐藤が行くから撃つなよ」「

急いで階段を駆け上がり、ドアを開けるとそこには口から血を流している竹中がいた。

目は虚ろで焦点が合っていない。

「助かるのか」と聞く、自分の声が震えているのが分かった。

衛生兵の佐々木は答えた。

「心臓を撃たれてい。——できる事はした。」

竹中はこの部隊で最初の「戦死者」となった。

そして、自分は今日一日で何人の『命』を奪った。
この一つの事実は決して変える事はできない。

「弾薬の確認をしておけ。『こちから一キータ、敵との交戦があり1名死亡』。敵は退却していきました、これから——』」

隊長は相変わらず態度を変えずに部隊と交信している。

2日目 自衛隊視点 3 (後書き)

「感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしなところがあれば「指摘お願いします。

次は津田君です。

3日目 民間人視点

4日目

公立高等学校 学生 「津田 吉弘」

日本 高速道路

9:13

自分を含むクラスメイトの状態を一言で言い表すと「不機嫌」だ。なぜ「不機嫌」かというと、みんなが待ち望んだ修学旅行がいきなり「延期」となったからだ。

まずは昨日の出来事を説明しよう。

新幹線を降りた後はひたすら歩いた、そりやあもう歩きましたよ。1時間くらい

ようやく駅に着いたと思ったら自衛隊の人にはひたすら駅で待たされた。

数時間ホームで待つた挙げ句ようやくバスがやって来て、自分たちはそのバスに乗った。

おそらくそのバスで町を観光する予定だつたらしい。

しかし、そのバスは観光をする事はなく近くの小学校に止まった。

『今日はここで一晩泊まるから忘れ物をしないようにー』
わけも分からずにたくさん的人がいる体育館の中でその日の夜を過ごした。

次の日、つまり今日の朝5時に叩き起された、じつしてバスに揺られているという訳です。

「昨日の戦闘機といい、自衛隊といいマジ意味わからねえよ・・・」
クラスからも愚痴が聞こえてくる。

自分も愚痴が言いたい。

「先生、これからどこに行くんですか」
おおお、女子ナイス！

「――― 学校に戻る。」
「はい?」

は?

「はいはい、みんな聞いて！ 実は昨日、日本海側の都市が武装組織に攻撃されていたみたいなんだ。それで先生達で話し合つたんだけど、修学旅行は落ち着いてから続きをする事にして、今回は一旦学校に戻る事にしよう。」

攻撃？修学旅行の延期？

ハイ？

他の人が質問を続けている

「今どうなっているんですか」

「まだ自衛隊が戦っている」

「テロですか？」

「わからない」

「トイレはいつですか」

「もう少しで休憩だから我慢しなさい」

「彼女はいるんですか」

「何回目だそれ」

何か道が外れている気がするけど気にしないでおいで。

クラスの雰囲気が良くなってきたと思いつながらふと外を見てみると
もう高速道路を降りており、どこか知らないところの道を走っている。

あー・・・のどかだなー

クラスの雰囲気もいい感じだし

あ、迷彩パターンの施されたたくさんの戦車や、ひいてでかい車が
すれ違つて行くではありませんか・・・
見間違いかもしれないけれども、自衛隊の人たちの顔が強ばつて見
える。

の人達は武器を持っているから戦う事ができる、けれども学生の
自分は何もできない。

悔しい

何もできない自分と、修学旅行が延期になつた事が悔しい。

タツチがどうしたって声をかけてきたけれども、
泣きそうな顔をしているのを見られたくないから寝たふりをする。
もちろん顔は見えないようだ。

どうして泣いちゃうんだよ
なんでこんなことになるんだよ
帰るのなら早く家に帰りたい

3日目 民間人視点（後書き）

「ご感想お待ちしております
誤字脱字、おかしなところがあればご指摘お願いします

4日目

陸上自衛隊 第一普通科連隊 一等陸士

「佐藤 智久」

日本 石川県 金沢市

20:43

状況を説明すると、自分たちは今非常に「まづい」状況に陥っている。

なぜなら

「次はどっちに」

「そここの交差点を右だ！」

「やつはま付いてきているのか」

「ぱっちり付いてきちまつてる……」

敵の装甲車に追われているからだ。

こちらには対戦車兵器など持ち合わせておらず、航空支援も望めないという最悪の状況の中

ただいま絶賛全力疾走中というわけで、住宅街に逃げ込みなんとか装甲車を撤こうとしているところである。

「そここの家に入るぞ！ ほら早く」

隊長の言われた通り手短な家に逃げ込んだ

民間人のほとんどが避難し終わっているため心置きなく戦闘ができる。

さすがに見知らぬ家の家に押し入るのは気が引けたが・・・

家に入り息を潜めて待っていると

装甲車がやってきてそのまま通り過ぎていく
随伴の歩兵も周囲を警戒しながら通り過ぎていく

どうやら難は免れたらしい

「よし、行くぞ」

隊長は休む間もなく家の裏口から出て行く。

時間ができたので説明すると、

そもそも自分たちの任務というのは
市内の病院が敵に包囲されているとの報告を受けて至急増援部隊を
送る必要があり、偶然近くにいた自分たち「ニキータ隊」にも増援
の要請があった。

そのため病院に駆けつけていたのだが、偶然敵の装甲車にバッタリ
出くわしてしまったのだ。

そういうしてこらつちに激しい銃撃音が聞こえて来た、どうやら病
院は「忙しい」らしい。

「5時方向！ またあの装甲車だ！！」

聞こえた瞬間振り返ると、先ほどの装甲車が道路の脇にある車を押
しつぶしながらこちらへ来るではないか。
なんとしつこい！

また全力で逃げようとしたら、隊員の一人が足を絡まらせ転んで
しまう。

そしてその隊員を助けようと一人が向かう。

それに気づいた装甲車はその動きを止め、その一瞬で人間をミンチにするであろう機関砲を一人に向ける。

間に合わない

しかし、装甲車はその機関砲を撃つ事なくいつの間にかスクランブルとなっていた。

（随伴の歩兵を倒せるのは今しかない。）

そう思い反射的に一人に狙いをつけ、引き金を引く。

突然装甲車を失い、混乱している敵は次々と倒れしていく

一瞬で随伴の歩兵4人と装甲車が撃破された。

「そつちは大丈夫か！？」

声がする方を見てみると「ラム」と「110mm個人携帯対戦車弾」を担いだ自衛隊員とライフルを持った数名の隊員がいた。

「大丈夫だ、それにしても助かった。

第二普通科連隊 二キータ小隊だ、そつちの所属は」

「第三十普通科連隊、チョッパー分隊 今から病院に行くんだが、おたくらの助けを求める無線が聞こえてね、他の仲間はそこで待つている。そつちは。」

「こつちも同じだ、一緒に行つても？ もうあんな日には遭いたくないからな。

『こちら一キータ、第三十普通科連隊のチョッパー隊と合流。これよつそちらに向かう』

『できるだけ早く来てくれ。今にも敵が一斉攻撃を始めそうだ』
『了解、到着するまで持ちこたえてくれ』

聞こえたな、行くぞ！』

これで敵の装甲車が来ても大丈夫だ。

「ライフルと対戦車兵器を担いだ勇者さま御一行は、魔王の軍と戦うために鉛玉の飛び交う病院へと向かうのであった。果たして彼らに明日はあるのだろうか、そして

「若崎 ――― さつさと歩け」

びつやう「チヨツパー隊」とは気が合いそうだ。

「感想お待ちしております。
誤字脱字、変なところがあつたら」指摘お願いします。

病院にたどり着くと文字通り「地獄絵図」であった。地面にはクレーターがいくつもできており、空は照明弾でまぶしいほどに照らされていた。

病院にはいくつもの大穴が開いており、そこから敵を食い止めようとして奮闘している自衛隊員の姿も見える。

しかし、問題があった

病院の周辺はどこも激戦区であり、とてもではないが銃弾の嵐の中をかいくぐりながら病院に入る事はできない。もし強引に入ろうものならここにいる全員が死体袋に入れられて病院に入れられるかもしれない。

隊長が無線で問う

「こちら一キータ、病院には到着したがどこから入ればいい。オーバー？」

「東側にでかい大穴が開いておりそこを防衛している部隊がいる、比較的安全な場所だからそこから入ってくれ。オーバー」

「何か目印になるものはあるか。」

「近くまで行けば分かるはずだ。」

「了解、アウト。」

聞いたな、これより東に移動する、各自警戒するよ！」

そして、数分も経たないうちにその『東側』に到着した。

無線で言つていた通り、目印など必要なかつた。

ビルが折れており、折れた部分は隣のビルへと突つかかつてゐるよ
うな状態だ。

近くにくるまでは他の建物が邪魔で見えなかつたが、これはひどい。
そしてそのビルのすぐ隣に病院の東側があり、折れたビルの破片で
開いたであろう文字通りの大穴があつた。

「やつら病院以外の建物を平地にするつもりかよ！」

「岩崎！見とれてないでさつさと走れ！」

岩崎3曹に『チョッパー隊』隊長の吉田3尉が怒る、これがチョッ
パー隊ではお決まりらしい。

そうこうしていのちに病院の大穴を守る自衛隊員と突破口を切り
開こうとしている武装集団との銃撃戦が見えて來た。

「奴らはまだ俺たちに気づいていないらしい、側面からやるぞ。杉
永は制圧射撃及び援護、伊藤は杉永のサポート。合図するまで撃つ
なよ。」

息を潜めて敵を一望できる場所まで移動し、隊長が合図を出す。

「配置に着いた、準備はいいな」

「こちら杉永、いつでも」

「チョッパー隊も準備完了」

「・・・よし、攻撃開始！」

一斉に弾幕が張られ一瞬で4人が血を出して倒れる。

倒れたやつの誰かが手榴弾を投げようとしていたらしく、投げられ
る事のなかつた手榴弾はそのまま爆発。
周囲にいた敵を一掃した。

「味方だ！出て行くから撃つなよ

敵意がない事をアピールしながら防衛隊と合流する。

「助かつたよ、司令室ならこのまままっすぐ行けばあるぞ。」

「司令官もそこそこ？」

「ああ」

すると岩崎が会話に割り込む

「なあ、そのビルは一体どうやつたらああなつたんだ？」

「どつかの大馬鹿野郎がビルを崩して病院ごとつぶそうとしたらし
いんだが、見ての通り隣のビルが俺たちを助けてくれた。
ちなみにその大馬鹿野郎共はここを突破しようとしていたんだが、
あんたらのおかげでそこに突つ伏している。」

指差す方を見てみるとさつき自分たちが倒した死体が倒れている。
なるほど、どうりで他の場所に比べて人数が少ない訳だ。

病院の外は酷い事になつていたが、内部はもつと酷かつた。

病院は民間人自衛隊員関係なく怪我人で溢れており、比較的軽傷な
人達は廊下で休んでいるという悲惨な状態だ。

どづやら手術室もフル稼働らしい。

歩いていると、死体袋であるう黒い袋が並んでいる場所があつた。
おそらくこの中にも「竹中工士」がいるのだろう。

歩みが遅くなつていたのだろうか、いつもに増して厳しい表情の岩
崎が速くしろと言わんばかりに強く引っ張る。

もづ、ひづのはじりじりと見ない方がいいだろつ。

これから自分の為にも

時刻はもう一時半を示していた。

「」感想お待ちしております。
誤字脱字、おかしな部分があれば「」指摘お願いします。

たどり着いたのは元は会議室として使われていたであらう広い部屋だつた。

並べられた机は病院の周辺が描かれた地図や無線機やらで散らかっており、部屋の隅には弾薬箱が積み重ねられていた。

部屋に入つていき隊長が近くにいた自衛隊員に司令官がどこにいるか聞くと、部屋の隅にいるもうじき壮年期を迎えるであろう文字通り渋い男を指した。

司令官に近づいていくと相手が「けりうて氣づいたらしく、眺めている地図を見るよう促す。

「ニキータ隊及びチヨツパー隊11145時、到着しました。」

「よく来てくれた、現状は・・・見ての通り敵に包囲されてしまつている。この調子だといつ病院に突入されてもおかしくない状況だ。

予定では10分後に負傷者と民間人を収容する為にヘリ部隊が到着する。

それまで耐えれば後はヘリに乗つて退却するだけだ。

ニキータ隊は東側の増援に、チヨツパー隊は正面に向かってくれ君たちの仲間はもうそこにある。

何か質問は・・・よし、ないな。」

司令官の説明を終えた後、部屋の隅に行き弾薬を補充し再び東側へと向かつた。

チヨツパー隊との別れは名残惜しかつたが、お互に「冗談をいいながら手を振つて別々の方向へと歩みを進めた。

ただただ、生き残つて欲しいという願いも込めて手を振つた。

東側に戻ると再び銃撃戦が始まっていた。

敵の兵力も最初のときよりも少し増えている事から徐々に「ここ」の大穴の重要性に気が付き始めているらしい。

実際、突如できた東側の大穴から司令室へと続く廊下にはバリケードが未だ作られておらず、ここを突破されたら病院の防衛戦は総崩れになるということを示している。

ならば増員して死守すればいいという話なのだが、病院の防衛部隊は負傷者が多くまともに動ける隊員は火力の集中している正面玄関を守らなければならなかつた。

東側の人員は自分たちニキータ隊ともとからいた隊員数名の合計1人で、装備は軽機関銃の「ミニミニ」2丁と先ほど装甲車をスクランプにした「110mm個人携帯対戦車弾」1つ。
後は個人装備の「89式小銃」。

重機関銃もほしいところだが病院になだれ込もうとする敵を牽制するため正面玄関に配備されているらしかつた。
しかたがない、対戦車装備があるだけまだマシな方だ。と愚痴をこぼす隊員に隊長が言い聞かせる。

敵の波状攻撃は比較的緩い方だったが、ヘリの到着時刻が近づくにつれて正面玄関の守りが堅いこともあってか次第にこちら側に終結しつつあつた。

「佐藤、後どれくらいか分かるか！？」

「あああ？ なんだつて！」

「あとどれくらいこいつらとやり合つていればいいんだ！…」

「あと5分だ！」

長い間爆音や炸裂音を聞き続けたせいで耳が遠くなつてゐるため、お互に大声で話さないといけない、そのため喉までもが痛くなつ

ている。

早くここから抜け出したい

そんな事を思つてゐるともつ出合いたくないやつの「エンジン音」がはつきりと聞こえてきた。

「装甲車！…1時方向！」

「りょうく」

唯一の対戦車装備を持つ隊員の声が途切れ、一同に嫌な予感が走る。

「おい・…・おい！…どうした！」

畜生！佐藤、あいつの代わりに撃て！早く…！」

後ろを振り向き対戦車武器を担いでいたやつのところまで行くと、流れ弾に当たつたらしくヘルメットに穴が空き床には血が流れている。

ついさっきまで傷一つなくピンピンしていた人間が今、こうしてぴくりとも動かすに目を見開いたまま倒れている。
悲しんでいる暇はない。

たつた今狙いを定めていたであろう「ラム」を手に取り、装甲車に向けて狙いを定める。

観測手が情報を伝える

「距離60、発射用意…・・・てえ！」

引き金を引くと弾頭が装甲車に向かって飛んでしま、命中。

しかし、敵の装甲が厚い正面を狙つたためまだ動いている。

用済みになつた「筒」を急いで地面に置き、発射に必要な発射機を取り外しすぐさま別のラムに取り付ける。

再び狙おうとするが敵は装甲車に取つて脅威である自分を狙つてきただではないか。

すぐとなりの壁に大量の弾が当たり、削られた壁の粉が自分に降り

掛かる。

「佐藤、大丈夫か！」

「大丈夫です！ですがこのままでは撃てません！援護を頼みます」「分かつた、3つ数えてから制圧射撃をするから隙をみてやつにそいつを叩き込んでやれ！！」

「了解！」

「3・2・1。制圧射撃！！」

味方の一斉射撃が始まり凄まじい銃声がなるが、今はこれ以上にないほど心強い音だった。

敵の銃撃が止んだ。

身を乗り出して先ほどより近づいてきている装甲車に狙いをつける。アドレナリンが分泌されているせいか視界がゆっくりして見える。敵が全員自分に気づいて発射を阻止しようとすると、味方の弾幕により次々と倒れていく。

装甲車もラムを担ぐ自分に気づいて機関砲をこちらに向けてくるが、もう遅い

引き金を引き弾頭を再び同じ場所へと撃つ。

いくら装甲が厚いからといって何度も同じ場所に撃たれては耐える事はできないと考えたのだ。

弾頭は吸い込まれるように装甲車へと向かっていき、命中。装甲車はそのまま爆発し火を噴いている。味方から歓喜の声が上がる。ざまあみろ！

しかし、なぜか嫌な予感がすると思つたら見事に的中してしまつ。

「防衛する全部隊に告ぐー、偵察部隊から敵の上陸部隊がの報告があつた。現在敵の先攻部隊らしい戦車部隊がこちらに向かっているとの事だ。予定の繰り上げにより負傷者のヘリへの積み込みは5分後に完了させる。くりかえす、敵の」

「佐藤、ラムの弾はまだあるかー？」

「残念だがさつきので最後だ・・・」

「うそだろおい！」

『東側の防衛部隊に告ぐ、敵の戦車2台がそちらに向かつたらしい。急いで撤退しろ、繰り返す撤退しろー。』

「了解

「言われなくたつてさつとトンズラしてやるよー。」

「佐藤、伊藤は先に撤退して防衛線を築け！ ほら早く行け！」

隊長に言われた通り急いで病院の中へと戻り、机をいくつか倒して隠れる場所を作る。

気休めにしかならないがないよリハマシだ。

各方面からも撤退が始まつており、むづじきの戦場からヘリに乗つて帰れる事を感じさせてくれる。

そつこじじでいると隊長達がまるで鬼から逃げているかのような表情で走ってきた。

「とにかく撃ちまくれ！ やつらなだれ込んできていやがるー！」

言われた通り、廊下の先の暗闇に撃ちまくる、///をつっていた伊藤も必死に撃つている。

すると陰の中から人影が見えた、それもたくさん。

それが見えた瞬間普段感じるものとは違う「恐怖」を感じた。

そう、謎の強大な力を前にしたときに足が震える恐怖と同じようなものだ。

そして、その恐怖をさらに増幅させるのがあたりから見えた敵の「銃剣」だった。

弾幕を張つて敵を近づけてはいなもの、少しづつ下がつては弾幕を張る。

その繰り返しだった。

『東側！何をしていい。早く屋上に来てヘリに乗るんだ。』

その無線が聞こえると同時に全員が全力疾走を始めた。

もう、部隊の士気は「〇」に等しくただこの病院、地獄から逃げ出したかった。

「動物の勘」というものだらつか。

気が付くと、屋上に到着しておりヘリにまっしぐらだつた。

武器は逃げる途中で捨ててきており、手榴弾も逃げながらピンを抜きながらも捨てて来た。

だれもがこの病院には産まれて初めて来たにもかかわらず、まるで何かに導かれるかのように。

もとから知つていたかのように全力疾走でここまでたどり着いた。ホバリングして待つっていたヒューキーこと「CH-1」にしがみつくように乗り込んだ。

全員が乗つた事を確認しへりは飛び立つ。

ヘリからの眺めは「よ」とはほど遠いものであった。

町は火の手で赤く照らされており、いくつかのビルも今にも崩れそうなほどであった。

病院には数えきれないほどの敵が押し寄せているのが暗くてもはつ

きつと分かつた。

もし、あそこに残っていたらと思つて漏りしそうになる。
そしてなによりも、遠くに見える海に数えきれないほどのHアクツ
ション型揚陸艇が見えたのである。

「隊長・・・これからどうなるんです」

「分からぬ、ただ俺たちはこの国を守る為に『闘つ』しかない。
それだけは俺の口から言える。」

安心したのかすぐさま睡魔が襲つてきた。

「ご感想お待ちしております。
誤字脱字、おかしな部分があつたらご指摘お願いします！」

金沢市から命からがら撤退した自分は基地に付くなり、緊急で作られた前線本部に向かい司令官と話をしているところだ。

「現在の状況は？」

「中国が日本へ宣戦布告、どうやらこの間の「海上保安船銃撃戦事件」が気に喰わなかつたらしい、この調子だと韓国軍もこの戦争に参加するかもしだん。」

「たまたもんじゃありませんね」

「話を戻そう、現在中国軍は日本海側に次々と上陸してきている。金沢市には本体らしい大部隊が上陸した模様、六戸2尉の部隊は補給が済み次第、敵の迫撃砲陣地を他の部隊と共に攻撃すること。これ以上奴らを東京に近づけるな。」

「レーダー基地から何か連絡は」

「現在複数のレーダー基地と連絡が取れない状態にあり、空中管制機で辛うじて穴埋めをしているところだ。」

「了解しました。」

状況を頭に叩き込み、状況を伝えるため疲れた目をしている部下のもとへと向かう。

その後は仮眠を取らせなければ・・・
いくりあいつらでもあの初陣は厳しいに違いないはずだ。

4日田

陸上自衛隊 第一普通科連隊 一等陸士

「佐藤 智久」

日本 石川県

6:10

今自分は薄暗いヘリの中で高機動車に乗り装備の点検をしているところである。

隣の田中と佐々木の会話に耳を傾けて暇をつぶしている。
彼らの会話を聞いていると自然と嫌な緊張感が薄まる、この部隊の連中には一種の才能があるのだろう。

「隊長、敵の所属は分かっているので？」

「ああ、世界に名高い『中華人民解放軍』だ、気を引き締めていけ。」

「田中1士、なんで中国は日本なんかに攻めてきているんだ? 何にもないはずだろ」

「佐々木1士、少しは頭を使え。今アメリカはロシアと絶賛戦争中、リーダー格のいない今なら名を挙げるチャンスだ。そこで最近勢いが衰え始めた中国は日本を屈服させる事でアジアにおける『アメリカ』になろうとしているのさ。」

「なるほどね」

他愛も無い話をして、暇をつぶしているとヘリパイロットからアナウンスが入る。

「あと20秒で到着する、六戸2尉、隊員達のガールズトークは済みましたか?」

「ああ、そのようだ。」

「そりゃあないですよ隊長!」

揺れを感じる、どうやら着陸したようだ。

ハツチが開くと同時に高機動車のアクセルが踏まれ勢いよくチヌークから出て行く。

明るさの変化で一瞬目が眩んだが、目が慣れて周りがはっきりと見えるようになる。

周囲を警戒している中、他のヘリも次々と着陸していく。

UH-1汎用ヘリからは2台の偵察バイクが降ろされ偵察部隊がすぐさま走り出していく、

他のチヌークからも他の隊員が降りてきて迫撃砲が降ろされている。

「こちから第一中隊、目標地點への展開が完了。これより敵の迫撃砲陣地へ攻撃を開始する。オーバー」

「こちから本部、了解した。制圧が済み次第機甲師団が行動を開始する。」

「了解、アウト。聞け、敵はこの先にある高台に迫撃砲陣地を展開しているとのことだ。これより偵察部隊及び第3中隊と協力してこれらを制圧する、いいな」

今回は「120mm迫撃砲」という心強い味方があり、高機動車に乗つての移動なので昨日のように歩き回らずには済みそうだ。

・・・作戦では迫撃砲による攻撃と同時に自分たちが左翼から、第3中隊が迫撃砲陣地の右翼を攻撃する予定である。

はずだった。

「おいおい・・・戦車がいるなんて聞いていないぞ。おまけに自走砲まで準備されている、やつら巧く 偽装しやがったな。だから偵察へりからは迫撃砲しか見えなかつたんだ。」

と、双眼鏡を覗いている隊長の一言一言から嫌な情報がひしひしと伝わってくる。

「戦車」、「自走砲」どれもこれも嫌な相手だ。

「「ひから第2中隊、本部どうぞ。」

「「ひから本部、どうぞ。」

「現在敵の迫撃砲陣地を偵察中だが脅威となる複数の戦闘車両を発見した。」

航空支援を要請する。オーバー

「「ひから本部、了解した。近くにいるコブラを2機支援に行かせる。」

「

「コブラか！富士総火力演習以来だな」

「「」の作戦が終わつたら10式戦車も見れるかもしねないぞ」

「マジかよ！ 隊長！こんな作戦早く終わらせてしまいましょうよ

！..」

「ああそうだな、まずお前達口はを閉じる事から始めようか」

そんな事をしているうちにヘリのローター音が聞こえてくる。

遠くに「コブラ」が見え、敵の迫撃砲陣地へと向かっている。が

へりに向かつて光が、ミサイルが近づいていく。

コブラがミサイルの誘導を惑わす「チャフ」をばらまくいて回避行動をとるが間に合わず、ミサイルはコブラの尻尾のようになに見えるテ

イルローターへと命中。

制御を失ったコブラはそのまま回転しながら落ちていき視界から消える。が爆発音が聞こえない、どうやら不時着したらしい。

近くにいた別のコブラも同じようにチャフをばらまきながら逃げていいく。

「第一中隊に報告、どうやら携帯式の対空ミサイルを持った部隊がその区域にいるらしい。救助ヘリを出すため至急敵部隊を排除せよ。オーバー」

「第2中隊了解、至急敵部隊の排除に取りかかる。よし行くぞ。」

草むらに隠していた高機動車に乗り込み移動を開始する。

ミサイルの軌道から敵の位置を逆算しその場所へと向かう、到着すると予想通り携帯式の対空ミサイルを担いだ敵が5人、40メートルほど先に見えた。

予想以上に近いが離れているよりもマシだ。

敵も同時にこちらに気づいたらしく銃弾を送り込んだといふ、こちらも高機動車を立てにしながらも展開し弾を送り返す。

市街戦に慣れたせいか高低差のある敵に当てる事ができない。

それでも敵には遮蔽がないため3人は倒す事ができた。

89式の弾倉を取り替え再び狙おうと頭を出したらどうに狙いをつけていた敵と目が合った。

どうやら自分が頭を出す瞬間を狙っていたらしい。敵の細かな動作が見える。

自分が頭を出したのを確認したそいつは弾の着弾地点を予測したらしく目が合った瞬間に少し銃口を上げ、引き金にかけている指を動

かす瞬間だった。

なぜか分からぬが、そのとき死を覚悟し目を瞑るつとした。
が弾は飛んでも来ない。

今さつき目が合つたそいつは地面に突つ伏している。
誰も撃つていなければはずなのに。

残りの1人も何が起きたか分からぬようで、すぐに逃げようとするが突然足掛けをされたように倒れる。
これも誰も撃つていなければはずだ。

では一体誰が

無線が入つてくる

「こちら第一一普通科連隊狙撃班、そちらの部隊は大丈夫ですか。」「どうやら彼らに命を救われたらしい、隊長が応答する。

「大丈夫だ、支援に感謝する。」「こちら第2中隊本部応答せよ。」「こちら本部」

「敵の対空部隊を排除した。もうコブラをよこしても大丈夫だ。」「了解、墜落したパイロットの生存も確認された。これより救護へりとコブラを派遣する。」

作戦はまだ始まつたばかりだ、味方がいるからといって気を抜いてはいられない。

「死」を受け入れようとしていた自分に喝をいれて再び弾痕が残つてゐる高機動車に乗り込む。

4日目　自衛隊視点　1（後書き）

「感想お待ちしております。
誤字脱字、おかしな部分があれば、」報告をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0800y/>

Call of Duty Modern Warfare2,5 「Japan」

2011年11月27日18時00分発行